

1. 今年度の研究について

(1) 研究テーマ

「弱視児童・生徒の自立活動に関する指導内容・方法の研究」

－目と手の協応性を高めるための指導の在り方－

第1分科会 研究推進担当

東京都弱視教育研究会（以下都弱視研）の加盟している視覚障害特別支援学校（盲学校）や弱視通級指導学級に通う児童・生徒は、見えにくさのため、よく見て手を動かす作業を苦手としている場合が多い。そのため、手指を使った細かな活動の経験が不足し、手指の巧緻性や目と手の協応性が十分育っていないことから、児童・生徒が意欲的に取り組める指導内容や指導方法・教材の工夫が必要となる。

しかし、近年は弱視教育に携わった経験年数が浅い教員が増えており、目と手の協応性を高める効果的な指導を難しいと感じている指導者も多い。

そこで、今年度は、都弱視研に加盟しているそれぞれの学校・学級での実践、その際の指導や教材の工夫、成果と課題について、記述式で調査（1次調査）し、まとめることとした。また、集まった調査の中から、成果がなかなか出ない事例を選び、更に、指導の工夫をしたり、経験を積ませたりすることでどのような変容があったのかを追跡調査し、手立ての有効性についても検証した。

(2) 研究内容

1) 授業研究

小学校2校で、今年度の研究テーマである目と手の協応性を高めるための自立活動の授業を行った。授業後の研究協議会では事前に提示した観点に基づき、協議を進めた。講師の先生からは、授業内容への指導・助言をいただいた。

2) 目と手の協応性を高めるための指導内容や工夫についての調査

【1次調査6～7月】

- ①目的 目と手の協応性を高めるための指導について、他の学校・学級の指導内容方法の工夫を知り、これからの指導に生かす。
- ②対象 都内の視覚障害特別支援学校（盲学校）及び弱視通級指導学級の教員を対象に調査する。
- ③内容 目と手の協応性を高めるため、各学校・学級で実践している指導内容や指導方法、工夫している点、成果と課題等について記述式にて回答を求めた。
- ④結果 各校が実践している内容がよく分かった。また、弱視児の場合、経験を積ませるだけではなかなか成果が上がらないため、様々な指導の工夫、見やすい・使いやすい道具の工夫も大切にしていることも分かった。ただ、工夫をしてもなかなか成果に結び付かなかった例もいくつかあった。

<指導内容について>

学習の基礎として指導方法や教材を工夫して時間をかけているはさみやカッターナイフ、図工で使用する道具の使い方の練習、造形、作図、裁縫が多くあがってきた。そのほかにも生活場面で必要なひも通しやひも結び、手指の細かな動きが必要なアイロンビーズ、アクアビーズなども行っていることが分かった。

<指導や教材の工夫の一例>

ア はさみの使い方

- ・切りやすい用紙(少し厚みのあるケント紙や色画用紙)を準備する。
- ・用紙の色とコントラストのよい色で切り取り線を引く。
- ・切り取り線の太さを5mm→3mm→1mmと変えて、スモールステップで指導する。
- ・紙を持つ親指の位置に印を付ける。
- ・刃を開く大きさに合わせて、刃の内側に印を付け、印が見えるまで開かせる。

イ 作図

- ・決まった長さの直線をかき際は、目盛りを見やすいよう、数字が逆さまになるように定規を置き、線を引く。

ウ のこぎりの使い方

- ・のこぎりの縦引きの刃と横引きの刃の違いを拡大読書器を使って確認させる。
- ・厚さ1cmの角材に5mmの線をマジックで印を付けたところから始め、だんだん線を細くしていく。鉛筆の線を切る際には、芯が濃くて丸まっているものを使用させる。また、角材の厚さを徐々に厚くしていくことで難易度を上げることもできる。

エ 裁縫

- ・布や針の色とコントラストのよい色の糸を使用する。
- ・1本取りでは、糸が針から抜けてしまっても気付かないことがあり、何度も糸を通し直す必要があるため、2本取りにする。

<道具選びについて>

ア はさみ

- ・持ち手の形状や刃の長さの異なるものをいくつか準備して、児童にとっての扱いやすさと、切りやすさで選択させた。
- ・刃を大きく開くことが難しい児童には、初期指導として、ばねばさみを使わせた。

イ 作図道具

- ・定規、三角定規、分度器は、透明なものは見えづらかったため、白黒反転のものを用意した。

ウ 裁縫道具

- ・見えにくさから縫い針に糸を通すことが難しかったため、糸通し器や卓上糸通し器、セルフ針を使用させた。
- ・細糸は絡まりやすく扱いにくい場合は、太糸を用意した。

エ まな板

- ・食材によって、白と黒、どちらのまな板が見やすいかを確認し、選ばせた。

【追跡調査(9月～10月)】

- ①目的 成果がなかなか出なかった事例から4つを抽出し、その後の児童の変容について調査する。
- ②方法 4例の指導者にその後の指導の内容と児童の変容について尋ねる。
- ③内容 都弱視研でこれまでに有効とされていた指導方法や教材の工夫、第1次調査で提出させたもの、研究推進委員会からの提案も参考しながら行ってもらう。それに基づいて指導対象児童の変容等について確認する。
- ④4つの事例の追跡結果は、以下のとおりである。

<追跡事例1>【はさみの使い方】

- ①対象児童 小1 近見視力 両 0.25 最大視認力 0.9(15cm,右)
眼疾患…遠視、両内斜視
- ②対象児童の目と手の協応性に関する課題・実態
線通りに切らなくてはいけないということがプレッシャーとなり、なかなか取り組もうとしない。
- ③指導・手立て・工夫
 - ・市販の易しい切り紙工作を作ることを目標とした。
 - ・ばねばさみを使ったり、指導者がはさみを一緒に持ったりして5mmの線を切らせた。
 - ・紙を持つ位置に印を付けた。
- ④児童の様子・反応・変容
 - ・ばねばさみを使ったり、指導者と一緒に切ったりすることで、徐々に自信が出てきた。
 - ・市販の切り紙工作は、動物の口や足が動いたり、手を離すとくるくる回って落ちたりするようなものができるので、楽しんで取り組むようになった。
 - ・切り紙工作は、作り方が難しい場合もあったが、手伝おうとすると、「一人でやりたいということもあった。
- ⑤指導して気が付いたこと・成果・課題
 - ・意欲的にはさみを使うという点では、切り紙工作は有効であった。
 - ・刃を大きく開くためには、握力を付けるなど他の指導も必要である。

<追跡事例2>【カッターナイフの使い方】

- ①対象児童 小3 近見視力 両 0.1 最大視認力 0.9(4cm,右)
眼疾患…強度乱視、遠視、色覚異常の疑い
- ②対象児童の目と手の協応性に関する課題・実態
 - ・鉛筆持ちでは切りたい線が見えず、刃を斜めに倒して切るため、線通りに切ることが難しい。
 - ・折れ線や直線で囲まれた図形では、頂点の手前で用紙を回してしまう。
 - ・頂点のところでカッターナイフを離して用紙の向きを変えると、切れていない部分できてしまう。
- ③指導・手立て・工夫
 - ・切りたい線が見えるように、カッターナイフの持ち方をカッターナイフの柄の上の部分に人差し指をそわせて持つようにさせた。
 - ・折れ線や直線で囲まれた図形を切る際は、頂点の部分に赤い点を付け(図1)、用紙からカッターナイフを離さず、用紙の向きを変えるように指導した。その際、カッターナイフの柄の部分が

直線と重なるようにすることも指導した。

- ・曲線を切る際用の紙の向きを変えるタイミングは、カッターナイフの柄の部分から線がずれてきたときだと声かけをした。

④ 児童の様子・反応・変容

- ・カッターナイフの刃が用紙に対して垂直になることで、切り口も滑らかになることが分かり、カッターナイフの柄の部分に指をそわせて持つようになった。
- ・ハートのような曲線の形を線の通りに切ることはまだ難しいが、波線(図2)の通りに切ることはできた。

⑤ 指導して気が付いたこと・成果・課題

- ・持ち方を変更することで、線通りに切れ、意欲にもつながった。
- ・切り口を触って比べるなどすることで切れ味が分かり、どの持ち方が自分にとってよいか選択できた。
- ・他の児童と違う持ち方であっても気にする様子がなく、学習が進められたので、自己選択の大切さを改めて感じた。

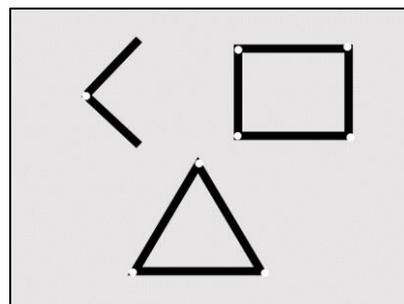


図 1

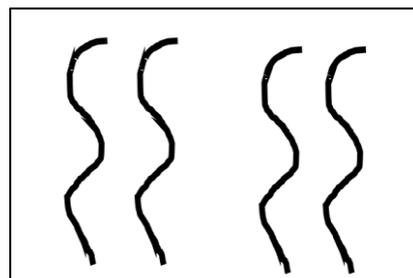


図 2

<追跡事例3>【金づちの使い方】

- ① 対象児童 小3 近見視力 両 0.1 最大視認力 0.9(4cm,右)
眼疾患…強度乱視、遠視、色覚異常の疑い

② 対象児童の目と手の協応性に関する課題・実態

- ・素手でくぎを持って打つことを怖がったため、軍手を使用させたが、それでも怖がる。
- ・ペンチ【くぎ打ち用のもの(写真1)とラジオペンチ】を使用させると怖がらないが、ペンチを握る手の力が弱く、くぎをまっすぐに支えて打つことは難しい。
- ・打ち込む際は、金づちの面が斜めになった状態でくぎを打ってしまい、斜めにくぎが刺さってしまう。



写真 1

③ 指導・手立て・工夫

- ・乾いた紙粘土に指でくぎを刺させた。その際、真上からくぎの頭を押した場合と斜め上からくぎの頭を押した場合の両方を比べ、真上から打ち込むことが大切であることを確認させた。
- ・乾いた紙粘土に金づちでくぎを打たせた。
- ・乾いていない紙粘土に、くぎを使わず、直接金づちで強く打たせ、紙粘土に金づちが斜めに当たったときと真っすぐに当たったときの違いを、粘土を触らせて確認させた。
- ・くぎは、太いものから徐々に細く短くしていった。
- ・角材は、くぎがさしやすい硬さものを準備した。
- ・本人の希望もあったので、くぎ用のペンチも使わせた。ただ、在籍校ではくぎ用のペンチがないので、ラジオペンチでも練習させた。
- ・キリに穴をあけて打たせた。

④児童の様子・反応・変容

- ・乾いた粘土の方がサクサクと打てるため、楽しいと感じていた。
- ・紙粘土に打つ方が角材に打つよりも怖がっていなかったが、くぎが細くなると目を近付けなければならぬため、不安そうにしていた。
- ・紙粘土で練習してから角材に打たせたので、くぎ用ペンチを使うと真っすぐ打てるようになった。
- ・金づちで乾いていない紙粘土を打ち込み、打った後に金づちが当たったところを触ることで、金づちが真っすぐに当たっているときの手の角度が分かってきた。
- ・キリで穴を開けると、くぎを刺し込むだけで安定し、手を打つ心配がないため、怖がらずに真っすぐ打つことができた。細いくぎであっても目を近付けずに打つことができた。また、指を打つこともなかった。
- ・「もっとやりたい」の声が聞かれた。

⑤指導して気が付いたこと・成果・課題

- ・角材に打つ前に紙粘土に打たせることは、怖さを軽減させる上で有効であった。
- ・乾いていない紙粘土にくぎを金づちで打ち込ませ、打った面を触らせることは、金づちを持っているときの手の角度が分かるため有効であった。
- ・くぎが刺しやすい角材を準備するなど、材料の選択も大切であると感じた。
- ・キリで穴を開けて打つことは、怖がらずに真っすぐ打つためには有効であったが、1cmの角材であっても貫通するほど穴を開けてしまうと、細いくぎでは刺し込んだだけでは安定しないため、どの程度の深さまで穴を開けるのかを指導者が事前に確認しておく必要がある。

<追跡事例4>【糸通し】

①対象児童 小5 近見視力 両0.1 最大視認力 0.4(7cm,左)

眼疾患…黄斑ジストロフィー、中心暗点

②対象児童の目と手の協応性に関する課題・実態

- ・拡大鏡を使っても、メリケン針とセルフ針の見分けが付かない。
- ・拡大読書器で見ながらセルフ針に糸を通すことも難しい。

③指導・手立て・工夫

- ・メリケン針とセルフ針の違いは、タブレット端末で拡大させて、理解させた。
- ・卓上糸通し器を使った糸通しの練習をさせた。
- ・セルフ針に糸を沿わせて下から上部の溝の部分に近付けていくという方法に慣れるまで、練習させた。

④児童の様子・反応・変容

- ・メリケン針とセルフ針の違いは、タブレット端末等のカメラ機能で確認することで理解できた。
- ・卓上糸通し器を使った糸通しも難しかった。本人がセルフ針でもう一度やってみたいと話したので、再度セルフ針で練習したところ、できるようになった。

⑤指導して気が付いたこと・成果・課題

- ・児童が扱いやすい道具を選択できるように、指導者が事前に使いやすいと思われる道具を準備しておく必要があると感じた。

(3) 研究のまとめ

①成果と課題(○成果 ◇課題)

○指導内容別に、指導方法や教材の工夫を共有することができたことは、有効であった。

○目と手の協応性に課題がある児童の意欲を高めるためには、実態に合わせた指導方法や教材の工夫が有効であることが分かった。

◇児童・生徒の変容を今後も継続して観察し、それぞれの指導方法や教材の工夫の有効性をより明らかにする必要がある。

◇今回の調査であがってこなかった目と手の協応性を高めるための指導内容について、有効な指導方法や教材の工夫について明らかにする必要がある。

②おわりに

見えにくい児童・生徒は、よく見て手を動かしたり、道具を使ったりする作業の経験が不足していることがあることを、指導者は把握しておく必要がある。

本研究会では、児童・生徒の実態を把握し、目と手の協応性を高める指導を行うために、適切な支援を行いながら指導する方法を知る機会を増やすことが大切であると考えます。

今回の研究において、明らかになった目と手の協応性を高めるための指導内容や指導方法・教材の工夫を生かして、今後、児童・生徒が意欲的に取り組み、少しずつ成果を上げることができるよう日々の指導を重ねていきたい。

2 研究授業

(1) 第1回研究会

自立活動学習指導案

指導者 足立区立足立小学校 澁谷 律子:T1

毛利 涼夏:T2

1 日 時 令和5年6月26日(月) 10時40分～11時25分

2 場 所 足立区立足立小学校 目の教室

3 対象児童 第3学年 児童1名

4 児童の実態 (別紙参照)

5 題材名 「作品展に飾る『なかよし村』をつくろう」

6 題材の目標

- (1) 今までの経験を生かしたり、資料をよく見て情報を得たりして、作りたいものを具体的にイメージし、作業工程を計画する。4-(5)
- (2) 目と手の協応性を高めるため、手指のトレーニングを通して、力の入れ方や両手を協応させる動きを習得する。2-(3) 5-(1)
- (3) 学習道具であるはさみを使い、作りたいものを正確に作る能力を高める。5-(5)

7 題材の評価規準、関連している自立活動区分・項目

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①資料を使って、作りたいものの具体的なイメージを掴んでいる。4-(5)	①今までの経験を生かして、作りたいものの具体的なイメージをもっている。 4-(5)	①完成させるために作業を計画したり、積極的に準備したりしようとしている。 4-(5)
②手本をよく見て、手指のトレーニングのやり方を身に付けている。5-(1)	②事前のトレーニングを生かし、はさみを動かす際の力の入れ方や両手を協応させる動きを行っている。 5-(1)	②積極的に手指のトレーニングに取り組む、動きを習得しようとしている。 2-(3) 5-(1)
③切り取る形や、線の曲がり具合に合わせて、はさみや紙の持ち方に気を付けながら切っている。5-(5)	③形良く切るために、学んだ切り方を使っている。 5-(5)	③作品を正確に仕上げるために、学んだ切り方を持続させようとしている。 5-(5)

8 指導観

(1) 題材観

本題材は、特別支援学校小学部・中学部学習指導要領 第7章の第2の5「身体の動き」における「(1)姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること」と「(5)作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること」を主軸に置いている。基本的技能、および作業の中でも、研究主題である目と手の協応性を高める指導を探るために、本児童の実態と照らし合わせて、はさみを使う活動を選んだ。

「目と手の協応とは、積み木を積むこと、紐を結ぶこと、ハサミを使うこと、分度器や定規を使うこと・実験をすることなど、あそび・日常生活動作、学習などで手を使う活動の全てである。幼児期の基礎的な目-手の協応能力の獲得は、初等教育における道具の活用による思考の深化に必要不可欠なレディネスといえる。道具の操作が苦手な弱視児童に対して、その活用を自立活動等で丁寧に指導することも、学習の深化の必要条件である。ハサミは、身体の世界で学ぶ幼児と道具の世界で学ぶ小学生との間の渡りの時期をつなぐ、極めて重要な道具といえる。」佐島 毅『弱視教育 Vol.59, No.4 2022』より引用

発達段階ごとの目-手の協応に関連する主な能力 佐島 毅『弱視教育 Vol.59, No.4 2022』

Piaget の発達 段階	感覚運動的段階		前操作的(自己中心的)段階			操作的段階
			象徴的思考		直感的思考	
学習課題	感覚運動活動期	感覚運動協定期	弁別学習期	平面構成学習期	立体構成学習期	初等教育
標準的年齢段階	0:0~0:10	0:10~1:6	1:6~2:6	2:6~4:6	4:6~6:0	6:0~
動作と認知の 課題	把持する 叩く 振る	入れる 出す 押す・引く	形・大きさ弁別 積み木を積む 回す	平面パズル ハサミを使う 上着を着る	立体構成 ハサミで形を切 り抜く	工作 リボンむすび 折り紙で鶴を折 る
描画・模写		殴り書き	縦線模写 横線模写 円錯画	十字模写 正方形模写 円模写	三角模写	菱形模写

本児童は、幼児期に活動を制限され、外からの刺激が少ない生活を送ってきているため、道具を使う経験や使用する友達を近くで観察することが少なかったと考えられる(詳細は児童観にて)。はさみという道具の操作を通して、基礎的な目と手の協応能力の獲得と上肢の運動能力の向上を目指し、さらに高学年に向けて、より高度な道具の使い方に自信をもって取り組もうとする前向きな気持ちを育みたいと考え、本題材を設定した。

本題材で『なかよし村』の住人のキャラクターとして使用している「すみっこぐらし」は、2012年に発表されたサンエックスのキャラクターで、愛らしさと親しみやすさに定評があり、幅広い世代に支持されている。キャラクターの色合いが優しく、それぞれにストーリーが設定されている。サブタイトルとして「ここがおちつくんです」とあるように、大半は、コンプレックスを抱え少々ネガティブながらも、前を向いて行動しようというストーリー展開になっており、本児が夢中になる理由の一つであると考えた。12月の作品展に向けて、「すみっこぐらし」に興味をもっている他の通級児と協力して、キャラクターが住む村を作ろうと提案したところ、とても意欲を示し、本題材につなげることができた。キャラクターが捉えやすい形をしている、ということも選択理由の一つである。本児は、自由帳などに「すみっこぐらし」のキャラクターの絵を描きながら、だんだん本物に近い形に描けてきたと実感しており、もっと描きたいという前向きな気持ちが現れてきている。単純な形ではあるが、目や口の位置で表情が変わってくるため、手本をよく見て位置を確認しながら描く学習にも適していると考えた。

(2) 児童観 ※児童の実態については別紙参照

本児は入学当初より本学級に自校通級している児童である。乱視に対応した眼鏡を装着しており、視力値は教育的弱視の範囲外である(両眼の矯正視力 0.3 以上)。

基本的に週2回2時間ずつの通級を続けており、主に、視覚認知力を育てる課題と、様々な粗大運動や微細運動に取り組んでいる。

重度心疾患による長い入院生活のため、就学前の生活経験が少ない。体の緊張を調節することが難しく、力の入れ具合を自然に測れず、疲れやすい。授業中、疲れが溜まると急に作業効率が下がるので、「ちょこっと休み※」を入れたり、作業を分割して短期集中をねらったり、好きなキャラクターを使って興味関心を誘ったりしている。協調運動や動きを模倣することが苦手で、諦めが早い。現在も日常の運動制限を継続しており、粗大運動は制限のある中で実施している。

就学前のフロスティググ視覚発達検査では、視覚の弱さが見られており、特に空間認知力の弱さが目立っていた。ペグさし、点つなぎ、模写等の机上でのトレーニングやななめの感覚を重視した粗大運動、日々の学習の積み重ねの成果により、通常の学習(国語や算数)で際立って困る様子は見られなくなってきた。

区の補助を受け、月に一度PTまたはOTが通級時に共に指導を行っている。動きのコントロールに必要な固有覚を鍛えるため、下肢と上肢、腕と手首と指等を調整しながら、力を効率的に使う方法を学んでいる(歩く・走る、ジャンプ、握る、投げる、摘む、指を動かす等)。

本児は本来とても活発で、友達と一緒に体を動かして遊んだり、競い合ったりしたいという思いをもっているが、運動制限により意欲に制限をかけなければならない場面が多くみられる。そこで、道具を使って作る作業を通して、作りたいものが作りたいように出来上がる楽しさや喜びを味わいながら、自己肯定感が向上することもねらいたいと考える。

※ 深呼吸をしたり、立ち上がって肩を上げ下げ、手や腕の力を抜いてぶらぶら等を行ったりする。

(3) 教材観

使用するはさみ

右の写真のように持ち手の形状や刃の部分の長さの異なるものをいくつか準備し、本児が用紙を切る際の、使い心地と正確度を鑑みたところ、右から2番目のはさみが一番使い勝手が良いという結果になった。理由としては、本児の指の形にフィットすることと、刃が他のはさみより細く長いので、紙を切るポイントが見やすいことがあげられる。

はさみで切る用紙の種類と大きさについて

今回3種類の用紙(色画用紙、色付きのケント紙(64g/m²)、色付きのケント紙(154g/m²)を準備し、直線切りと半円切りを試させたところ、切り応えはあまり変わらないものの厚みと張りのある用紙の方が左手で支えやすそうであったので、今回の作品に選ぶこととした。

大きさについて、本児の手の大きさや摘む指の力などを考慮し、丁寧にはさみで切り取るために、主にはがき大の用紙を使用した。両手の協応性や左手の握力が向上するにつれて、さらに大きな用紙でも正確に切り取ることができるようになると考える。



手指の力の向上をねらう体操

本児の課題である手指の固さを改善し、はさみの開閉を安定させるために、手指の体操を授業の始めに行うこととした。STやOTのアドバイスをもらいながら、特に指先の操作に意識が向くような工夫と、摘む、握る力の向上をねらう工夫を体操に取り入れるようにした。

YouTube の活用

はさみの使い方を映像で見ることによって、あらためてはさみで紙を切るイメージを掴むことができ、取り組む作業の流れや気を付けるポイントを明確に理解することにつながると考え、取り入れた。映像は見せたいものだけを大きく映し出すので、印象に残りやすく、効果的に活動への意欲を引き出すことができる。

9 年間指導計画における位置付け

自立活動として、はさみの操作の指導を、年間を通して行っている。

1年次 「季節の木をつくろう」と題し、通級児全員で、春は新緑の葉、夏は花や虫、秋は紅葉、冬は雪の結晶を、はさみで画用紙や折り紙を切って制作している。本児は、下絵を描きその線上を切る場合、はさみを線に合わせて切ることは難しそうだった。雪の結晶は、数回折り畳んだ折り紙をはさみで自由に切る、というやり方だったが、はさみの刃のどこで切っているのかが分からず、指で引き剥がす様子が見られた。

2年次 追い出したい鬼の顔の形や目・鼻・口・角の形を、はさみで画用紙から切り取り、のりで貼り合わせて作った。画用紙に下絵は描かず、偶然切り取られた形を見て「角みたいな形ができた」「これとこれを目しよう」と楽しそうに作業が進んだ。

「〇〇ちゃんハウスをつくろう」という題材名で、5×6cm位の長方形の画用紙を基本に、折ったり切れ目を入れたりして、部屋の家具を作る学習を行った(全5時間)。はさみでどこまで切るかを細かく指示しながら作業を進めたところ、出来上がった形に満足しながら、毎時間集中して作業を続けることができた。

3年次 今年度も「季節の木」に取り組み、画用紙に描かれた葉の形に合わせて切るという学習を4月に行った。1年次より線に沿ってはさみで切る技術は身に付いてきたが、紙を支える左手の動きがぎこちなく、両手の協調性を高める指導の必要性があると判断した。

10 題材の指導計画と評価計画 全8時間

次	時	目標	○学習内容 ・学習活動	評価規準(評価方法)		
				ア	イ	ウ
第1次	第1時	作品展に向けて学習計画を立て、活動の見通しをもつ。	<ul style="list-style-type: none"> ・12月の作品展に、紙で作った工作を出品することを知る。 ・テーマを決め、構想図を描いて、活動の計画を立てる。 ・はさみを自在に使えるように握る力を付けたり、左手の動かし方を学んだりすることを知る。 	① 発言 行動	① 発言 行動	① 発言 構想 図
	第2時	手指の動かし方や両手操作に気を付けながら、はさみを使った切り方を学ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> ・握力を上げる体操 その1 ・両手操作トレーニング その1 ・YouTube「はさみの使い方」 ・紙を切る時のはさみの向きや、支える左手の動きにネーミングをして、実践する。 ・本時の振り返りを行う。 	②③ 行動	② 行動	② 行動
	第3時	手指の動かし方や両手操作に気を付けながら、段階的にはさみで紙を切る練習を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・握力を上げる体操 その2 ・両手操作トレーニング その2 ・1回切り→連続切り→左カーブ→半円切りを体験する。 ・本時の振り返りを行う。 	②③ 行動	②③ 行動	② 行動
	第4時	紙を折ったり、重ねたりしてからはさみで切る作業を行い、作品を作る。	<ul style="list-style-type: none"> ・握力を上げる体操 その2 ・両手操作トレーニング その2 ・紙を折って切る、2枚重ねて切る、絵を描いてから切る等を体験し、作品を作る。 ・本時の振り返りを行う。 	②③ 行動	②③ 行動 作品	②③ 行動
第2次	第5時	自分で描いたキャラクターの形に沿って、両手を協調させながら、はさみで切り取る。(その1)	<ul style="list-style-type: none"> ・握力を上げる体操 その3 ・両手操作トレーニング その3 ・キャラクターの中から、形が単純なものをはさみで切り取る。 	①② ③ 行動 作品	②③ 行動 作品	①② ③ 行動
			<ul style="list-style-type: none"> ・手本を見ながら、切り取った形に目、鼻、口を描く。 ・キャラクターが持つ物を作る。 ・本時の振り返りを行う。 			

	第6時(本時)	キャラクターの形に沿って、両手を協調させながら、はさみで切り取る。(その2)	<ul style="list-style-type: none"> ・握力を上げる体操 その3 ・両手操作 トレーニング その3 ・キャラクターの中から、形が複雑なものを選んではさみで切り取る。 ・手本を見ながら、切り取った形に目、鼻、口を描き、必要な色を付ける。 ・キャラクターが持つ物や、村にあるものを作る。 ・本時の振り返りを行う。 	①② ③ 行動 作品	②③ 行動 作品	①② ③ 行動
第3次	第7時	村にある木や家をイメージし、紙の種類を選び、製作する。	<ul style="list-style-type: none"> ・握力を上げる体操 その3 ・両手操作トレーニング その3 ・作りたいものを計画する。 ・形状や色によって紙の種類を選び、切りやすいはさみを安定させて使用する。 ・本時の振り返りを行う。 	①② ③ 行動 作品	①② ③ 行動 作品	①② ③ 行動
	第8時	活動を振り返り、さらに作品を良くするための計画を立てる。	<ul style="list-style-type: none"> ・計画書にある目標に沿って振り返り、できるようになったことを記す。 ・12月の作品展に向けて、他の通級児と協力し、作品をより良くする方法を考え、計画する。 	① 発言 行動	① 発言 行動	① 発言 計画書

11 指導にあたって

紙工作の経験を生かす

昨年、手と目の協応性を高める学習として、自分の部屋を紙工作で作った。ベッドや机、テーブル、椅子を、5×6cm位の長方形の画用紙を基本に、折ったりはさみで切り目を入れたり、丸いシールを張ったりして製作した。この経験を思い出すことで、今回の製作活動のイメージが明らかになったり、作りたいものや作り方が思考しやすくなったりすると考えている。

握力を付ける

本児は、毎年学校で行う体力調査の握力の値が出ない。手を握る際に第3関節が曲がり難しく、力が入らない。PTに相談したところ、未学習によるところが大きく、機能的な問題ではないという判断であった。今回、はさみによる作業を行う前に、動かしたい関節を意識し握力を付ける体操を取り入れ、作業を効果的に行えるようにすることをねらう。

12 本時(全8時中の第6時)

(1) 本時の目標

- ・積極的に手指のトレーニングに取り組み、動きを獲得しようとする。
- ・キャラクターの形に沿って、両手を協調させながら、はさみで切り取る。

(2) 本時の展開

時間	○指導者の発問・学習活動	指導上の留意点 配慮事項	評価規準 (評価方法)
導入 5分	○前回作った作品を見てみよう。 ・本時のめあてを確認する。 ・本時の学習の流れを知る。	・前回の作品を見て、よかったことと っとよくしたいことを確認する。	アー① 発言・行動
展開 ① 15分	○にぎにぎスクワットを音楽に合わせて行おう。 ・握力を上げる効果の期待されるトレーニングを行う。 ○新聞ロングロングゲームで、前回よりも記録をのばそう。 ・目と手の協応と、両手の協応を高めるトレーニングをゲーム形式で行う。	・力が付いてきたことを実感できる手段をとる。(握力計で計る、長さを比べる)	アー② ウー② 行動
展開 ② 20分	○キャラクターをはさみで切り取ろう。 ・前回より形が複雑なものを選んで、両手を協調させながら、はさみで切り取る。 ○切り取ったキャラクターの顔を描こう。 ・見本を見ながら、切り取った形に目、鼻、口を描き、必要な色を付ける。	・キャラクターは以前に本児が描いたものを印刷しておく。 ・切り方と左手の動かし方のポイントを作業の前に確認する。 ・キャラクターの目、鼻、口の見本を工夫し、分かりやすく提示する。	ウー① 発言・行動 アー③ イー②③ 行動・作品 ウー③ 行動・作品
	・手に持つ物や、必要なものを自由に作る。	・キャラクターは以前に本児が描いたものを印刷しておく。 ・切り方と左手の動かし方のポイントを作業の前に確認する。 ・キャラクターの目、鼻、口の見本を工夫し、分かりやすく提示する。	ウー① 発言・行動 アー③ イー②③ 行動・作品 ウー③ 行動・作品

ま と め 5 分	○本時を振り返ろう。 ○次回の学習内容を確認しよう。	【振り返りの観点】 ・はさみで切る右手の動きはどうだったか。 ・紙を持つ左手の動きはどうだったか。 ・目や鼻や口は、思う位置に描けたか。	
-----------------------	-----------------------------------	--	--

(3) 授業参観の視点

- ・対象児童の目と手の協応性に関する発達段階に応じた指導目標だったか。
- ・道具(はさみ)の操作を通して、基礎的な目と手の協応能力の獲得と上肢の運動能力の向上を目指す指導計画だったか。
- ・対象児童の作業効率や意欲を高める教材・教具の工夫がなされていたか。

研究協議

講師 筑波大学 人間系 障害科学域 准教授 佐島 毅 様

1 授業者自評

- ・対象児童は就学前にはさみを使う経験があまりなかったので、1年次からはさみの操作練習を重ね、少しずつ技術を身に付けてきた。
- ・対象児童が作業のトータルをイメージし、作りたいものを思い通りに描けるようにということを意識した。
- ・「もっとみんなはできる」と、自分と周りを比べて自己肯定感が上がらない児童には、成功体験を重ねるようにして心的な安定を図ることを目指している。

2 質疑応答・協議

- ・「チョキチョキカーブ」といったはさみの切り方を言語化していた。どのような効果をねらいとして行っているのか。→楽しそうだからやってみたい、できそうだ、という気持ちをもたせ、言葉のリズムに合わせて操作できるように、リズムカルな言葉を使った。
- ・はさみの操作技術は、はさみを使うだけでは身に付かず、握力や両手の協応性を高める手指のトレーニングを合わせて行うことで、はさみを操作する力を付ける指導ができていた。
- ・自分なりの切り方をしようとしている様子が見られた。教えたい切り方と両方やらせて比べることで、綺麗に切るにはどちらが良いのか気付くことができると思う。

3 指導・講評

- ・児童が生き生きと活動できていた。信頼関係が築かれていると感じた。
- ・小学生は道具の時代と言える。定規やコンパスなどの道具を上手く使えないと深く学べない。そのためにも、低学年ではさみの学習は非常に重要である。
- ・聴覚情報やリズムがあることで動作のイメージ化ができる。「チョキチョキ」といったオノマトペ(擬音語・擬態語)を使うのはとても有効である。
- ・自分でできるようになるためには動作分析が必要となる。励ましの言葉を掛けながら、スモールステップを用意することでできるようになる。この授業では、少しずつ段階を準備して成功体験を積めるような工夫がされていた。



(記録 文京盲学校 岩田 優希)

(2) 第2回研究会

自立活動学習指導案

指導者 練馬区立中村西小学校 照屋 容子:T1

中谷 瑠璃:T2

1 日 時 令和5年10月27日(金) 10時00分～10時25分

2 場 所 練馬区立中村西小学校

3 対象児童 第6学年 児童1名

4 児童の実態 (別紙参照)

5 題 材 名 「魚をたくさん泳がせよう」

6 題材の目標

(1) 針と糸を使った布小物の製作に関心を持ち、意欲的に取り組んでいる。2-(3)

(2) ボタンの特徴や付け方を理解し、安全にボタン付けができる。2-(3)、5-(5)

7 題材の評価規準、関連している自立活動区分・項目

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①裁縫用具を安全に使うことができる。2-(2)	①ボタンの付け方を理解し、身の回りの生活に役立たせようとしていたり、自分なりに工夫したりしている。2-(3) 5-(5)	目的に応じた縫い方で製作活動に進んで取り組もうとする。 2-(3)
②ひもを使ってリボン結びや玉結びができる。5-(5)	②自分の作品を正しく評価し、更に工夫すべきところはないか考えられる。2-(3)	
③針と糸を使って、糸通し・玉結び・玉どめ・ボタン付けができる。5-(5)	③ボタンの形を捉えたり、針と糸の造りを理解したりして、適したボタンの付け方が分かる。 4-(5) 5-(5)	
④裁ちばさみで、印の通りに裁つことができる。5-(5)		

8 指導観

(1) 題材観

本題材は、研究主題である目と手の協応性を高める指導の一つとしてボタン付けに重点をおくことにした。家庭科の活動で行われた小物作りは、第5学年の既習となる内容である。今回、魚の形を取り上げたのは、フェルトを直線や曲線に裁つのに適した形だったからである。また、布を用いた小物作りからの発展でボタンを付けた作品を繰り返し製作して、繋げられるように展示していく。展示をすることで見てもらう喜びを味わい、生活を豊かにすることにも意欲的に取り組めるようになるのではないかと考える。作品作りを通して、用具の安全な扱いが身に付くようにしていくとともに、できる喜びと達成感を味わい自己肯定感の向上が図れるようにしていきたい。本児童は在籍学級において、みんなの中でやってみたいという気持ちや、僕にもできそうだと思うものにはチャレンジしたいという前向き

な気持ちをもっている。

通級を開始したことによって、はさみでは大きく開いて直線を切ったり、線の通りになめらかに切ったりすることができるようになった。コンパスできれいな円が描けたり、リボン結びがだいぶできるようになったりしてきている。また、点描写では、定規を押さえることで線がしっかり引けることが分かるなど、できることが増えてきているのを実感していた。

その後、「僕、もっと早く目の教室に通っていれば、できることがもっと増えていたんですよ。きっと。」という切ない言葉を聞いてからは、更に多くのことにチャレンジさせるよう、指導内容を工夫している。

今回は、5年生の家庭科の学習内容と関連した題材となる。裁縫用具の安全な取り扱い方を理解し、目的に応じたボタン付けの基礎的・基本的な知識や技能を身に付けさせたい。その活動によって、注意深くものを見るようになったり、細かいものの見方が分かるようになったりすることをねらいとしている。この活動が、目と手の協応性の向上に繋がり、フェルトにボタンを付けてできる小物の製作に達成感を味わい、物を作る楽しさや日常生活で活用する喜びを実感させていこうと考える。

また、糸については、一本取りでは縫い進めていくうちに、穴から糸が外れても気づきづらい実態があるため、二本取りで縫うことにする。そうすることで針から糸が外れずに安心して縫うことができると思った。

(2) 児童観 ※児童の実態については別紙参照

本児童の通級を開始するまで弱視であることに対するケアは、4年生から最大ポイントの拡大教科書を準備していただくのみであった。

昨年度、弱視通級指導学級の存在を知り、5年生の2学期から週2時間の通級を始めた。超低出生体重児だったこともあり、体も小さく成長が緩やかだったため、視知覚や目と手の協応性などの感覚の成長にも困難さがあった。

在籍校では、とても賑やかなクラスに所属していたので、課題に取り組んでも達成まで見届けてもらえなかったり、活動が消極的になったり、活動から逃避したりすることがしばしばあった。見えているふり、できるふり、できたふり、分かったふりなど、その場を取り繕って大人しく過ごすこともあったと、話をしている中で明らかになった。

自己に肯定的な感情をもつことができない期間が長くあり、定規で線を引いても歪んでしまったり、運筆がスムーズではなかったり、一度上手くいかなかったことに対しては、苦手意識が強く残り、それらの課題を前にしたときには、涙を流して固まってしまう場面も見られる。また、今年度から通級時間を4時間に増やし、レベルを上げた課題に取り組んでいるが、取組に消極的で逃避することもある。通級を開始してから少しずつできることが増えてきていることを実感し始めているからこそ、自己を肯定的に捉えることや焦らずに前向きな気持ちで行う学習が、本児の生きる力につながると考えた。

(3) 教材観

はさみ

紙を切る活動は毎回しているが、今回は布を裁つための裁ちばさみの活用となる。裁ちばさみは、布を裁つための刃なので、裁ちばさみで布以外のもの（紙やビニール等）を切ると、裁ちばさみの切れ味が鈍るという造りを理解して扱い、使い方や使い心地の違いに気付かせる。

紙を切るはさみは、力強く握らなくても切れるが、裁ちばさみでは、柔らかく、形の動きやすい布を裁つので、机に裁ちばさみの下の刃をつけて大きく開いてゆっくり裁つ指導が必要となる。手が小さいこともあり、大きな裁ちばさみを大きく開くのは難しいので、ある程度開いてほしいところにマジックで線を書き、その印を目処に開けるようにする。

また、下の刃を机につけて裁つための工夫として、座る椅子を低くして机を高くすることで、目とフェルトの距離を近くしたり、立って卓球台の上で裁たせたりする経験も重ねる。目と手元の距離と姿勢が自分に最適となる状態を選ばせたい。

デスクスレダー

デスクスレダーは、卓上型糸通し器である。針をセットする場所、糸をセットする場所があらかじめ指定されている。針入れ・糸かけ・糸切りのシールでガイドが付いているので、使い方もとても分かりやすい。指定通りに針と糸（針穴は楕円形のものを使う。刺繍針や、丸穴針は使用できない。）をセットし、レバーを押すだけで糸が通ってしまうという優れものである。対応していない針や、対応していない糸を使うと壊れてしまうため指導が必要である。細い針穴に刺繍糸のような太い糸を入れるなど、無理に扱くと破損の原因になるため、安全な扱い方を理解し、正しく使って、長く愛用させたい。また、このデスクスレダーのよいところは、糸通しだけではなく糸切りも付いていることで、糸切りばさみにその都度持ち直す手間もはぶける。

針に糸を通す作業を面倒だと思ったり、針に糸を通すときにちょっと焦点が合わなかったりすることがある。そのことで、学習意欲が低下するより、便利な道具があることを知ること、意欲が向上する方が良く考えた。

<使い方>

- ①針入れに、針の穴側を下にして針を入れる。
- ②糸かけに糸をかけ、軽く押さえる。
- ③レバーをゆっくり押し、針に糸を通す。
- ④針をゆっくり持ち上げることで、糸が針穴に輪になった状態で通るので、その輪をそっと引っぱる。
- ⑤糸切りに糸をかけ、中に仕込まれているカッターで適当な長さに切る。

布の種類

織物や編み物の素材は、直線を切る分にはまだよいが、裁った後にほつれてしまったり、縮んでしまったりして扱いづらい。一方フェルトは、細かな繊維が圧縮されてシート状になった布なので、縦横に伸びにくく、どの方向から裁っても糸のほつれが出にくい。また、硬く切った感触が分かりやすいので、今回は、本児童でも扱いやすいフェルトを使用する。

フェルトを裁つ際、曲線を滑らかにするためには、大きく開いた刃に、フェルトをどのように当てるかが重要になってくる。布を動かしやすい、その感覚をつかみやすいことから、フェルトが適していると考えた。

フェルト素材の温かみのある雰囲気や優しい肌触りは、見えにくさをもった児童も製作を楽しみながら目と手の協応性を高めることができるのではないかと考えた。

視覚支援

- ・師範用大型ボタンを使って、ボタンの種類を確認する。また、裏表の役割の意味を指導し、意味を理解させることで、裏表を間違えてボタンを付けてしまう確率が下がると考えた。
- ・小さいデザイン性のあるボタンは、拡大読書器を使って観察し、様々な穴の数のボタンや足付きボタンのように、形の造りが独特なものもあることを理解させる。
- ・デジタル教科書の動画を活用し、ボタン付けのイメージをもったり、ボタン付けの手順カードで流れの見通しがもてるようにしたりする。実際に拡大読書器を使った教師の師範も確認する。
- ・裁縫セットの中を整理整頓するために、一段目と二段目のそれぞれの画像と、針の数を数える習慣がつく言葉をカードにし、裁縫セットの中に入れておくようにした。

9 年間指導計画における位置付け

在籍校での作品作りは、「練習布に確か・・・ボタンを付けたと思います。」と、本人の記憶に残っていない。そのため既習事項ではあるが、繰り返し指導が必要と考えた。

紙を切る活動よりも布を裁つことの方が、さらに手指の巧緻性が問われる。その力を付けるための活動として、なみ縫いの感覚をつかむため、穴の空いたウッドパネルに紐を通してリボン結びの練習をしたり、紐の端を結んで玉結びの役割を実感したりしていく。

また、はさみを使う作業では、印に合わせて切ったり、切ることに意欲をもって取り組んだりすることができるようになる。拡大読書器を使って細かなものの見方に慣れ、小さいものでも注意深く見る力が付くよう指導を重ねる。そして、これらの活動を通して、生活や学習に必要な道具の扱い方が身に付くようにする。

10 題材の指導計画と評価計画（6時間扱い：1回25分）

次	時	目標	○学習内容 ・学習活動	評価規準(評価方法)		
				ア	イ	ウ
第1次	第1時	紙用と布用のはさみの違いを理解する。	○はさみの扱い方の違いをつかむ。 ・紙を切る。	①④ 行動 作品		
	第2時	針と糸の使い方を理解する。 手縫いに関心を持ち、用具を準備している。 なみ縫いの仕組みを知る。	○拡大読書器の使い方を理解し、針と糸の造りを確認・観察する。 ・デスクスレダールの使い方を理解する。 ・針刺しに針を刺す角度を意識する。		③ 行動 発言	
	第3時	針と糸を使って、玉結び・玉どめができる。 拡大ボタンを付けた花を作る。	○なみ縫い・玉どめ・玉結びについての理解を深める。 ・紐の端に玉結びをしてから穴の空いたウッドパネルに紐を2本通してリボン結びをする。なみ縫いの感覚をつかむ。 ・デスクスレダールの使い方を練習する。 ・玉結び・玉どめの練習をする。 ・拡大ボタンを付ける。 ・フェルトを裁つ。	①② 行動 作品 ③ 行動		
	第4時	裁ちばさみを正しく扱うことができる。	○型紙を使ってフェルトに印を付け、裁ちばさみで魚の形に裁つ。	①④ 行動 作品		
第2次	第5時(本時)	ボタンを付ける。 正しい付け方を理解する。	○ボタンの種類を理解し、適切にボタンを付けることができる。 ・拡大読書器で映し出された2つ穴、4つ穴、足付きボタンの種類を理解し、用途を区別することができる。 ・魚の目になるように位置を考えてボタンを付ける。	①③ 行動 作品	① 行動 作品	行動

	第6時	ボタンホールをつくる。 名前の縫いとりをする。 魚の形にステッチを入れる。	○魚に装飾を付ける。 ・布を折って切り込みを入れることを理解する。 ・名前の縫い取り・なみ縫いをする。 ・針の持ち方や方向を意識して、なみ縫いをする。 ・出来上がった魚を掲示する。	①③ 行動 作品	② 行動 作品	行動 作品
--	-----	---	--	----------------	---------------	----------

11 指導にあたって

切りやすい紙で練習してから、裁つ場所に印が付いているフェルトを使うことで、じっくり見て切れるようにする。

大型ボタン・大きな針・毛糸を使ってボタン付けをしたものを確認し、見通しをもって小さなボタン付けに取り組むようにする。

12 本時(全6時中の第5時)

(1) 本時の目標

拡大読書器を使って、ボタンの種類や付け方を理解し、針と糸を使って安全にボタンを付けることが意欲的にできる。4-(5)、5-(5)

(2) 本時の展開

時間	○指導者の発問・学習活動	指導上の留意点 配慮事項	評価規準 (評価方法)
導入 5分	<p>○前回までの振り返りをしよう。</p> <p>○ボタンの観察をしよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・拡大読書器でボタンの種類と名前を理解し、ボタンの役割を考える。また、実際に拡大ボタンを触ってみる。 ・小さいボタンの観察をする。 ・正しいボタン付けの仕方を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・切った魚の形を客観的に観察させる。 ・大型ボタンを実際に触って形を捉え、小さいボタンも触って、大きさに違いがあることをイメージしてから始める。 ・見た目も美しく、取れないボタンと、そうでないものを見本を触って見比べさせ、どのようにボタンを付けると良いのか考えさせる。 <p>◇付け方見本・ボタン付けの手順カードを用意する。</p>	イ-③ 発言・行動
展開 10分	<p>○ボタンを付けてみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・拡大読書器を活用し、ボタンの付け方や手順を確認する。 ・ボタンを付ける。 ・穴に3~4回通す。 ・ボタンと布の間に隙間を空ける。 ・糸を固く巻く。 ・玉結び、玉どめが布に付いている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ボタン付けの手順カードをもとに、ボタンの付け方が分かるようにする。 ・拡大読書器を使ってボタン付けの師範をする。 ・玉結びが布についているかの確認をする。 ・一針ごとにしっかり引っ張り、弛みが出ないようにさせる。 ・隙間が空きすぎないように、糸が巻けるようにする。 	ア-①③行動 作品 イ-③行動 作品 ウ
まとめ 5分	<p>○付けたボタンの確認をしよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・付けたボタンについて自己評価する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ボタン付けが正しくできているか、手順カードを使って確認させる。 	イ-②発言

(3) 授業参観の視点

- ・対象児童の目と手の協応性に関する発達段階に応じた指導目標だったか。
- ・補助具(拡大読書器やデスクスレーダー等)を活用することによって、よく見て意欲的に作業を進めることにつながったか。

研究協議

講師 筑波大学 人間系 障害科学域 准教授 佐島 毅 様

1 授業者自評

対象児童（5年生）は、昨年の9月から入級し、それまで支援を受けてこなかった。入級して初めて補助具を使うことにより、できることが増えてきた。今後も自己肯定感を高めるため、指導を続けていきたい。



2 質疑応答・協議

- ・デスクスレダー（卓上糸通し器）は、本人が選んだ方法か。
⇒押すだけで針に糸が通るので、ハンディ型の糸通しより簡単である。
- ・中学進学に向けて、自分から援助依頼ができるようになるために、どのような指導をしているか。
⇒援助依頼する内容のカードを作り、そのカードを担当の先生に見せるようにしている。また、同学年の児童とのコミュニケーションは難しいが、下級生の面倒を見る意識が出てきているので、通級でかかわりを持たせている。

3 指導講評

(1) 研究授業について

- ・児童が達成感を感じられるように、一つずつ上げる階段を準備していく授業が素晴らしい。自己肯定感を高めるような授業を目指すことは、児童の障害の有無や年齢にかかわらず、教師が常にもっておくべき基礎・基本の姿勢である。
- ・一つの学級の中で、自分の力が発揮できたり、周りから認められたりする場があると、学校生活全体がその子にとっての居場所となる。そういった場を意図的につくることが大事である。



(2) 目と手の協応性を高める指導

- ・例えばひもを結ぶときや階段を下りるとき、目で見ることだけで動作をしているわけではなく、体の感覚で動作している。目を閉じていてもできるのは、体の感覚が覚えているからである。それをイメージできるように、自立活動や教科活動の手立てを工夫するとよい。
- ・「動作」はいくつもの動きが複合している。それを分解して一つずつつなげ、最終的に全部つなげて一つの動作にすることが大事である。分解した動作の手立てを工夫するとよい。
- ・はさみを使い始めるのは、3歳くらいからである。4歳になると自由にはさみを使い、簡単な工作を始める。弱視児でも2歳くらいから丁寧に練習していけば、4歳くらいから使い始めることができるようになる。

（記録 立石中学校 尾科 正幸）

令和5年度 研究総会 記念講演

「弱視教育の基礎・基本」

講師 帝京平成大学 人文社会学部 児童学科 教授 田中 良広 様

1 はじめに

2006年国連総会で「障害者の権利に関する条約」が採択され、日本は2007年に署名、2014年には批准した。国際条約は法的に憲法に次ぐ位置付けである。また、50条あるこの条約の後には、障害者が障害を理由に権利が行使できないと判断した時に、個人で国連に通知できると定めた選択議定書がある。2022年、国連の人権委員会の審査の結果、日本は改善勧告を受けた。今のままでは、日本のインクルーシブ教育システムは、グローバルスタンダードから取り残されてしまう可能性がある。

特別支援教育がどれだけ小・中・高の先生方に理解啓発されているのか、その橋渡し役が都弱視の先生方の役割である。合理的配慮について先生方や保護者に周知し、配慮要求し、必要としている子どもたちの教育環境を整えることに力を注いでもらいたいと切に願う。

2 弱視児童・生徒の視覚認知特性

弱視の子どもたちの見え方が分かる調査結果を2種類紹介する。

まず、弱視児の読速度を、晴眼児と比較した調査（佐藤、1974）（被験者 盲学校と小学校の弱視児 95名）で、視力0.3で晴眼児の7割以下、視力0.02~0.03で3割以下の速さとなっている。読みにかかる時間は、晴眼児の値を1とした場合、1年生は3.06倍、4年生までは差が縮まるが、5・6年生になると差が広がり始める。弱視児の読速度は晴眼児よりかなり遅く、視力が低下するにつれて、読速度はさらに遅くなるのが分かる。

次に、弱視児の「形態知覚検査」の標準化を通じた検証を見てみよう。（五十嵐、1972）（被験者 229名の弱視児）

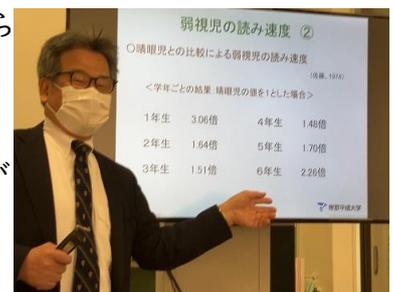
3つの形態知覚検査

(A)日常生活で頻繁に実物を知覚できるもの

(B)主に実物を通して視経験が行われるもの

(C)主に平面的図形（絵本など）を通して視経験が行われるもの

以上の結果、弱視児は(C)検査の得点が高く、形態知覚の先行経験を本などから得る場合、かなり正確な視覚パターンを形成できるものの、実物から得る場合は不正確なものになりやすいということが分かる。また、0.06以下の弱視児は、(B)検査の結果が極めて低いことから、視力の低い弱視児ほど、実物から得られる視経験が乏しくなりがちだということが分かる。



3 改めて問い直す「弱視レンズ訓練」

「教師と親のための弱視レンズガイド」(1995)という五十嵐信敬先生編著の本がある。現在までに出版された唯一の弱視レンズ教本として、考え方を押さえるために役立つ。

弱視レンズ指導を一過性のものにせず、「こんなに上手になった」「こうなれるようにがんばろう」と指導を継続し、弱視児が生涯にわたる力を身に付けるために、以下の事柄を積み上げていく。

【弱視レンズ訓練の結果の処理と評価】

- ①平均と標準偏差の数値を記録し、パフォーマンスの出来具合をはかる。
- ②結果を数量化、客観化することで、動機付けを高めたり、目標を明確にしたりする。
- ③各弱視児の指導計画と結果を照らし合わせながら、指導内容の継続とレベルアップを判断し、力を高めていく。

【弱視レンズ指導で確認する事柄】

- 弱視レンズは書字する方と反対の手で保持する。
- 眼鏡をかけている場合はアイシールドを折り返して使用する。
- 単眼鏡を初めて使用する場合は、必ず三脚固定で視標を見せる。
- 可能な限り、羞恥心が芽生える発達段階に達する前に弱視レンズ指導を始める。

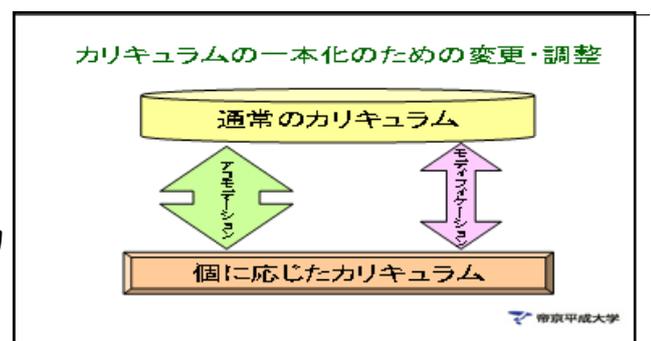
4 弱視児童・生徒の視覚認知特性

学習評価に関する基本的な考え方は、障害の有無にかかわらず同様だ。個々の児童生徒の障害の状態等に応じた指導内容や指導の工夫を行うこと、観点別学習状況を踏まえた評価を適切に行うにあたり、「技能」には二つの側面があることを確認したい。

- ①人文・自然・社会科学系教科学習における技能
- ②総合科学系教科学習における技能

インクルーシブ教育システムの構築と充実に向け、都弱視の先生方の役割として、②における技能の評価基準を、以下のように、在籍校と連携して構築して欲しい。

なお、特別支援学校では、総合科学系教科である体育、技術・家庭、音楽に関して、独自の基準を設けて評価を実施している。



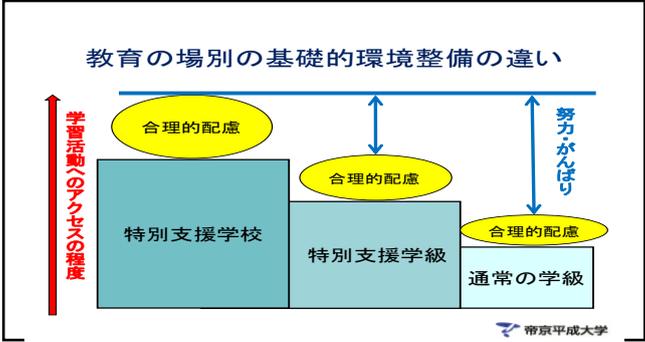
【在籍校と連携して実施すべきこと】

- 弱視児童・生徒の総合科学系の教科について、その評価基準がどのように設定されているかを確認する。
- 視覚障害が直接的要因として当該学習活動に影響しており、実施できない場合の代替学習の実態を明らかにする。
- 包括的な評価基準を設定するためには、カリキュラム研究を通じた検証が必要なことから、当

面は個別的な評価基準を当該校とのすり合わせをして設定していく。
 ○特に総合科学系の教科に関して、代替学習の考え方と評価方法に関して、理解・啓発を継続的に進めていく。

5 合理的配慮について

右の図は「これ位の基礎的環境整備と合理的配慮があれば、あとは努力と頑張りで埋められる」という就学先決定のための保護者の材料とすることができる。合理的配慮は、要求することにより提供されることが原則であり、その際には対立ではなく、互いのやり取りにより合意形成を探ることが必要である。そして忘れてはならないのは、合理的配慮と自ら克服する力のランスを見据えて支えていくことが、教育者としての責務であるということだ。



6 おわりに

五十嵐信敬先生(1949~1997)のことは「視覚障害乳幼児の発達を阻害する要因は、その子どもを取り巻く大人の社会的態度である。」



- 子どもの能力を勝手に値踏みしていないか
- 明確な目標を立てて指導を行っているか
- 子どもに期待をかけているか

(記録 足立小学校 澁谷 律子)